毎日歌壇

詠

米川千嘉子 選

夏休み給食なくて体重の減る子のありて列島酷暑　春日井市　月夜の雨

△評▽家で満足に食事が取れない子供たち。「体重が減る」という具体が本当につらい。酷暑も貧困も日本を焼いてゆくよう。

ばあ、ばあと高知の言葉愉しゃな大阪弁はやんか、やんかと　河内長野市　寺田　愛子

△評▽大阪弁の作者が耳にする土佐弁。どちらも楽しい会話のリズムを作っている。

清流の故郷を捨てて噴き出しぬ怒りを素直に表す強さ　坂戸市　納谷養代子

蜘蛛の巣のきらめく朝だわくわくすることを決めるあみだくじみたいに　京都市　小池ひろみ

許すべきだった盗んだ吾の金で吾にプレゼントを買ったあの子を　横浜市　友常　甘酢

こんなにもいいことあった本日に献血しますお裾分けです　金沢市　竹内　一二

夏夕や畳んで戻す本当に小さく重い吾が子の衣服　須崎市　野中　泰佑

歩行器を借りて午後には使ひこなす母はしなやかをさな児のごと　東京　浅倉　修

亡妻の去ったあの夜も暑くって桃色の花供花にならずに　四街道市　松田　保男

この男と結婚するんだ電流のあっという間の一生であった　大阪市　森川　慶子

加藤　治郎 選

小さき手で小さきパンツをひき上げるおむつがとれて君は少年　東京　青木　公正

△評▽まばゆい光を感じる作品だ。君が少年となる場面を捉えた。清らかな姿だ。それを見守る家族がいる。愛があふれている。

ゆっくりと首が曲がっていくひとだ　やさしい瞳の獣となって　大津市　世田　夏雪

△評▽変身のシーンである。描写に迫真のリアリティーがある。白馬を想像した。

霧雨をひとり歩けばスカートに羊の匂いすこしだけして　奈良市　古井さらさ

チュルチュルと水噴き上がる蛇口手で次々ふさぎ一人で泣いた　広島市　堀　眞希

ぬいぐるみ　ちぎれた腕を縫い合わせ、話しかけるの「今日も愛してる」　横浜市　朔月　七

歩行者用ボタンに気づかずぼんやりと陽だまりで終わりを待っている　東京　森本　有

おかあさん「シャイニング」って襖から笑った顔を出すのはやめて　八幡浜市　三浦　将崇

人間はときに景色になることも仕事なんだとティッシュを配る　津市　川原田明子

強い筆圧の星にまみれた地図　ビジネスホテルの聖書のあいだ　東京　土居　文恵

さみだれに生駒の山は潤され木々の緑が濃くなってゆく　生駒市　宮田　修

水原　紫苑 選

傘なんてきかない雨に濡らされて黒髪ひかる夏の戴冠　札幌市　鈴木　精良

△評▽唯一無二の人間の存在が戴冠する、夏の生命感。生のアリバイのような傘は去れ。

ぞろぞろと花火のあとの人の列どの心臓にも残響やどり　東京　奥山いずみ

△評▽花火の美しさではなく、激しい聴覚の痕跡が心臓に宿る。

朝を待つ羊のようなひややかさ楽譜をいまだ綴れずにいる　さいたま市　雨谷　詩穂

夏が来て前世の記憶が甦える夕立前の樹々の静けさ　宇治市　黒野　れお

砂糖水つつと垂らしてひとときの蟻の秩序の崩壊を見る　東京　永井　駿

週末の彫像になるわたしからさらってほしい貝の記憶を　碧南市　江原　冬莉

どうしても犬の眼は翡翠いろとどめたままの油彩になって　平塚市　芝澤　樹

ねえ、それは裁ちばさみだわ、ダンボール切ってるけれど闇夜を裁つわ　千葉市　星野　珠青

燕の子五つなるゆえ名付けたり　広大智慧観と一字ずつ　新発田市　佐藤　榮征

かなしくてさみしいくらいでちょうどいい花火をずっと部屋で見ている　掛川市　賀茂　杏子

伊藤　一彦 選

「七十八年経ちましたね」父の遺影に「お父さん、もう傘寿です」　春日市　林田　久子

△評▽父親は敗戦の年に世を去ったのだろうか。であれば作者は2歳の時。父親に語りかける文体を生かした歌は深く心に響く。

時々は我に返って思い出す真珠湾あっての広島長崎　鎌倉市　佐々木　眞

△評▽真珠湾を攻撃しなければ広島長崎の悲劇はなかったのでは、とまた浮かぶ想念。

繊細な子に戦争をどう伝え共に向き合うか模索する夏　奈良市　久保　祐子

今年も八月十五日はウクライナが話題になりそうな不幸　札幌市　佐藤　学

新聞紙、死に損ないのゴキブリの命を奪いきる、新聞紙　雲南市　熱田　一俊

かりそめのダイバーシティ八月のフードコートに色はあふれて　千葉市　芍　薬

おおよその円さがあれば美しい月も西瓜も人の心も　札幌市　橘　晃弘

わが中の炎天のフェリー乗り場にはいまも帽子を振る父のあり　垂水市　岩元　秀人

最低の賃金だけで生きている都市の野花がおれをはげます　ふじみ野市　雨雨雨汰

資本主義のほころび見せる倫理なき不正まみれのワンマン企業　川越市　小畔川　霞

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や、同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁です。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。

入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開し、本社が作成または許諾した出版物やメディアに掲載することがあります。